

日本通訳翻訳学会 第11回年次大会基調講演

身体としてのことば

——「スタイル」の限界——

定延利之

(神戸大学)

1. はじめに

ことばやコミュニケーションの研究諸分野では、「発話とは、発話者が何らかの目的達成の意図をもってなすものである」「言語とは、そのために発話者に使われる道具である」といった、「発話者の意図」を前提とした発話観・言語観がしばしば暗黙裡に前提とされる。だが、このような意図に基づく発話観・言語観(「目的論的な発話観」「道具的な言語観」と仮称)は、日常生活における発話やことばをどの程度うまくとらえているだろうか？

たとえば心神喪失状態での多くの発話には意図や目的意識がなく(少なくとも感知されず)、そこで発せられる言語は道具として機能していないように思える。だが、このような場合にまで目的論的な発話観・道具的な言語観の妥当性がこれまで唱えられてきたわけではない。問題は、目的論的な発話観・道具的な言語観が「日常的なコミュニケーション」において全面的に妥当するのか、妥当しない場合が実はあるのか、ということである。

本稿では、目的論的な発話観・道具的な言語観が日常的なコミュニケーションにおいても全面的に妥当するわけではないということを論じる。次の第2節～第4節では目的論的な発話観の検討をおこない、第5節では道具的な言語観の検討をおこなう。

2. 目的論的な発話観の批判的検討

この節で指摘する目的論的な発話観の問題点とは「目的論的な発話観では、コミュニケーションの観察が十分にリアルなものになり得ない」ということである。日々繰り広げられるコミュニケーションを我々が観察する際、その表層だけでなく、コミュニケーション参加者たちの喜怒哀楽に直結する切実な部分をも観察しようとするのであれば、話し手があからさまに意図的に切り替え使いこなしてはばかりの「スタイル」に着目するだけでは不十分で、話し手の意図の及ばない部分を認めて、これに着目する必要がある。

まず、「スタイルの切り替え」という考えで説明できる事例を見ておこう。得意先の会社社長と自分の部下に「あの件をよろしく」と依頼する場合、得意先の社長には「あの件どうかよろしくお願い致します」と丁寧に言って頭を下げ、自分の部下には「あの件、君もよろしくな」などと軽く言って肩を叩くとする。得意先の社長に丁寧に依頼する様子を部下に見られても別段恥じることはない。部下に向かってぞんざいに依頼するところを得意先の社長に見られてもどうということはない。ここで

SADANOBU Toshiyuki, "Language as body: Why we cannot rely on Stylistics alone in explaining speaker-internal language variation?" *Interpreting and Translation Studies*, No.11, 2011. pages 49-73. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

は話し手は[例の件の依頼]というコミュニケーション行動に際して、相手との関係に応じてスタイルを切り替えている。このように、「スタイルの切り替え」という考えで説明できる事例はたしかにある。

では、得意先の社長に対して猫撫で声で「あッ、社長、いつもお世話になっておりますう！ あッ、あちらの件でございますけどお、えー、なにとぞ、よろしく願いいたしますですう、[空気をすすって]シー」とモミ手、平身低頭する一方で、自分の部下に対しては「てめえ、あの話、気い抜くんじゃねーぞゴルア」などとねめつける、という場合はどうか。得意先の社長に向けた言動は部下には見られたくないだろうし、逆に部下相手の言動は得意先の社長には見られたくないだろう。ここでは、単に「人間関係に応じたスタイルの切り替え」と言う以上の、「別人」かと思いたくなるような変化が起こっている。

もっとも、この変化は、文字通り「別人」になってしまうほどの根本的なものではない。「別人」になってしまうほどの根本的な変化とは、たとえば、島尾敏雄の小説『帰巢者の憂鬱』(1955)に描かれているようなものである。そこでは、夫婦喧嘩で初め、「わたしが悪かった。行かないで下さい」などと言っていた妻が、やがて「アンマイ、ワンダカ、テレティタボレ」(お母さん、私を、連れて行って)などと故郷の島ことばをしゃべりだし、我に返った後は「わたし何かして？」のように再び共通語でしゃべりだす。島ことばをしゃべっていた際の記憶は、共通語に戻った時点で引き継がれず、消えてしまっている。本稿で「人格」の変化と呼ぶのは、このような変化である。先の「あッ、社長」から「てめえ、ゴルア」へ至る変化は、言語も記憶も引き継がれており、人格の変化とは異なっている。

本稿では、この「スタイル以上、人格未満」の人物像を、「キャラクタ」(適宜略して「キャラ」と呼ぶ。つまり、相手に応じて自在に変えてよいスタイルと違って、変わらないことが期待されているものが本稿のキャラクタである。それが変わってしまったところを目の当たりにすると「こいつ、オレの前では猫かぶってたんだ」「この人、強い相手にはとことん弱いな」などと、何事であるかすぐに察しがついてしまうが、見られた方も見た方も気まずいもの、かといって、「人格」ほど根本的ではないものと言うこともできる。「スタイル」「キャラクタ」「人格」それぞれの本稿での定義と例を、次の表1にまとめておく。

	定義	例
スタイル	あからさまに意図的に切り替えて差し障りがないもの。	得意先の社長に向けた「あの件どうかよろしく願いいたします」と自分の部下向けの「あの件、君もよろしくな」
キャラクタ	本当は意図的に切り替え可能だが、切り替えてはならず、切り替えられないことになっており、その切り替えが露呈するとそれが何事であるかすぐ察しがつくが気まずいもの。	得意先の社長に向けた「あッ、社長、いつもお世話になっておりますですう！」と、部下向けの「てめえ、あの話、気い抜くんじゃねーぞゴルア」
人格	意図的に切り替えられないもの。	島尾敏雄『帰巢者の憂鬱』における妻の変貌

表1: 「スタイル」「人格」「キャラクタ」の本稿での定義と例

「人格 (personality)」と「キャラクタ (character)」という2つの用語は、心理学ではほぼ同義で用

いられることも多いようだが、ことばとコミュニケーションの観察では、「意図的に切り替えられないもの」と「意図的に切り替え可能だが切り替えてはならず、切り替え不可能ということになっているもの」の区別は後で見ると有益である。そこで、たとえば「A子ったら、すごい怒っちゃって、キャラ変わってんの(笑)」学校では『姉御』キャラで通してるけどバイト先では実は『妹』キャラ。バレたらはずかしいな」のように、人間のあり方を指すことばとして巷間に流布している日常語「キャラクタ」との近縁性を考え、後者の意味を担う専門用語「キャラクタ」を新しく定義する次第である。

以下では人格の変化は措いて、日常的なコミュニケーションに観察対象を絞り、スタイルだけではいかに不十分か(キャラクタという概念がいかに必要か)を具体的に示す。

たとえば林芙美子の『放浪記』(第二部, 1930)には、同棲していた男が、やがて故郷の村に帰って音信を絶ち、たずねてみると家族の反対で結婚を翻意しているというくだりがある。当然ながら主人公(私)はショックを受けるが、男を道義的に非難する記述は一切ない。その代わり、文章中で繰り返し示されるのは、男の様変わりである。同棲中は「俺を信じておいで」と言い、あれほど「勇ましい」と思っていた男が、ここでは「気の弱い男」に変わり果て、主人公の突然の来訪に驚いて「眼をタジタジとさせ」、「首をたれ」て父親の言葉を聞き入れ「一言も云ってくれない」。菓子折を置いて帰る主人公に「追いつがった男」は、菓子折を返して来いと母に言われたと言い、「お話にならないオドオドした姿」で、主人公がその菓子折を海へ投げ捨てた後も「犬のように何時までも沈黙って」「ついて来」る。つまり男は、重大な約束を反故にした悪者というよりも、ひたすらなさない者として描かれている。男にとってはこの方が酷かもしれない。なぜなさないかという、キャラクタを貫けず、変えてしまっているからである。「相手に応じてスタイルを変えているだけ」「父親を前にして新しい人格が生まれた」などという言い訳は通用しないだろう。

このように、我々には、相手や状況に応じて「(本当は意図的に変えられるが)変えてはならないもの。つまり、意図的に変わらないことになっているもの」(いまの男の例なら『勇ましい人』という人物像)がある。それを「キャラクタ」と呼んでいるのは、それが、相手や状況に応じてあからさまに切り替えて差し支えのない「スタイル」とは(さらには意図的に切り替えられない「人格」とも)違っているからである。キャラクタを一貫させられないのは恥ずかしいことであり、他者の人物イメージが一貫していないと「キャラ変わり」を指摘することは、少なくとも日本語社会では、その者をおとしめる上で、道義に訴える以上の効果をもたらすことさえある。だからこそ、それが同情すべき人物であれば、あえて相手の弱みに踏み込まないといった、指摘の差し控えが見られることもある。

福永武彦の『草の花』(1954)に登場する汐見という肺病患者は、サナトリウムでいつも超然としている。だが実は、別のBサナトリウムにいた頃に自殺未遂を起こした過去を持ち、クリスチャンでもある。Bサナトリウムの患者はこの情報を「こんなこと喋っちゃ悪いかな」と言いつつ、「面白い話」として主人公に告げる。汐見と交流のある主人公は、「全然汐見らしくない。別の人の話を聞きたいだ」と驚き、この話を汐見に持ち出すことをはばかる。ここで、悪いと知りつつ面白がられていること、また、親しい間柄では持ち出さないよう気を配られていることも、「キャラ変わり」にほかならない。次の例(1)は山崎豊子『白い巨塔』から採ったもので、佐々木商店の没落(店主の佐々木庸平が病死すると、未亡人のよし江が懸命に切り盛りしても店が傾いてきたということ)を背景に、出入り業者・野村の振る舞いの変化が、キャラ変わりとして、地の文で((1a)),あるいは登場人物(佐々木よし江・大村伝助)によって((1bc)),非難されている。

- (1) a. 夫の庸平が達者で店を繁昌^{はんじやう}させていた時は、卑屈なほどの腰の低さで出入りし、よし江にも御寮人^{ごりやうにん}はんとお世辞がましく呼んでいた野村が、^{てのひら}掌を返したようにぞんざいな口調で奥さんと呼び、くわえ煙草^{たばこ}で、すっかり品薄になった店内を見廻した。

[山崎豊子『白い巨塔』(四)1969.]

- b. 「野村はん、うちの主人の生存中^もは揉み手をして、この店の敷居^{また}を跨いだあんたが、よりもよって業界の中でも一番きつい真珠湾攻撃をかけはるとは思うてまへんでした。しかも死んだ主人の控訴審の承認調べを目前^{まへ}にしてるわたしらに、ようこんな酷いことをしはりましたな、その上、この返品伝票に判まで擦せ^おといいはるのですか」

[山崎豊子『白い巨塔』(四)1969.]

- c. 大村伝助は、じろりと野村を見、
「あんたところは、われわれに抜けがけで商品を引き上げ、一番債権が少ないはずやのに、まだその上、^{きぜわ}気忙しゅうに云いはりまんのか、佐々木庸平さんの生存中^もには揉み手^でで出入りしてたことを思うたら、女手で今日まで頑張^てって来はった奥さんの話から、先に聞くぐらいの気持はおまへんのか」
^{たしな}窘めるように云い、佐々木よし江の発言を促した。

[山崎豊子『白い巨塔』(五)1969.]

ここでは、『下位者』キャラから『上位者』キャラへという他者(野村)のキャラ変わりが、「おまえは今まで『下位者』キャラだったではないか」と批判されているが、逆に、上位者から下位者へという自身の地位転落を悟りつつ、それまでの『上位者』キャラを変えるわけにはいかずに苦悩する例もある。

有島武郎『或る女』では、現在から約百年前、横浜からシアトルへ向かう船「絵島丸」における、早月葉子と、著名な田川夫人の出会いが描かれている。高飛車な田川夫人に、葉子は自ら進んで『下位者』として応対し、田川夫人を『上位者』として扱う。ところが、外界とは切り離された、何十日にもわたる長い船上生活の中で、外界とつながらなければ意味のない身分や学歴などに代わって、いまそこにある葉子の圧倒的な美しさが、徐々に人々をとらえ、葉子の地位を押し上げてきた。こうした葉子の地位向上は、田川夫人にとっては、地位の低下に他ならない。次の(2)は田川夫人の苦悩が描かれている部分である。

- (2) 絵島丸が横浜^{きんぼし}の^{つな}棧橋に繋がれている間から、人々の注意の中心となっていた田川夫人を、海気^{うき}にあって息気をふき返した人魚のような葉子の傍において見ると、身分、閲歴、学殖、年齢などといういかめしい資格が、却て夫人を固い古ぼけた輪廓^{りんかく}にはめこんで見せる結果になって、唯神体のない空虚な宮殿のような空いかめしい興なさを感じさせるばかりだった。女の本能の鋭さから田川夫人はすぐそれを感じ付いたらしかった。夫人の耳許に響いて来るのは葉子の^{うわさ}噂ばかりで、夫人自身の評判は見る見る薄れて行った。ともすると田川博士までが、夫人の存在を忘れたような振舞をする、そう夫人を思わせる事があるらしかった。食堂の卓^{はさ}を挟んで向い合う夫妻が他人同志のような顔をして互^{たがいたがい}々に^{ぬすみ}窃見をするのを葉子がすばやく見て取った事などもあった。と云って今まで自分の子供でもあしらうように振舞って

た葉子に対して、今更ら夫人は改った態度も取りかねていた。よくも仮面を被^{かぶ}って人を陥れたという女らしいひねくれた妬^{ねた}みひがみが明らかに夫人の表情に読^{しか}まれ出した。然し実際の処置としては、口惜しくても虫を殺して、自分を葉子まで引き下げるか、葉子を自分まで引き上げるより仕方がなかった。夫人の葉子に対する仕打ちは戸板を返すように違^{ちが}って来た。葉子は知らん顔をして夫人のするがままに任せていた。葉子は固^{もと}より夫人の慌^{あわ}てたこの処置が夫人には致命的な不利益であり、自分には都合のいい仕合わせであることを知っていたからだ。案の定田川夫人のこの譲歩は、夫人に何等かの同情なり尊敬なりが加えられる結果とならなかつたばかりでなく、その勢力はますます下り坂になって、葉子は何時の間にか田川夫人と対等で物を云い合っても少しも不思議とは思わせない程の高みに自分を持上げてしまっていた。落日になった夫人は年甲斐もなくしどろもどろになっていた。恐ろしいほどやさしく親切に葉子をあしらうかと思えば、皮肉らしく馬鹿^{ていねい}丁寧^{あらい}に物を云いかけたり、或は突然路傍の人に対するようなよそよそしさを装って見せたりした。死^{へび}にかけて蛇ののたうち廻るを見やる蛇使^{かいつよう}のように、葉子は冷やかにあざ笑いながら、夫人の心の葛藤を見やっていた。

[有島武郎『或る女』1911-1913.]

このような例は、文学作品にかぎられているわけではない。たとえば、「嵐」という男性アイドルグループが、テレビの新番組『嵐にしやがれ』の記者発表をおこなった際(2010年4月20日)、「どんなゲストが来たら緊張するか?」という記者からの質問に対して、櫻井翔という「嵐」の一員は次の(3)のように答えている。

- (3) オーレー、は、村尾さんかなー。オレの、温度としてやっぱり、報道の温度でしか会ってないからー、オレここで「アハー!!」とか言ってんの見られるのちょっとつらい。

ここで「村尾さん」と呼ばれているのはニュース番組(『NEWS ZERO』)のメインキャスター・村尾信尚氏のことで、同番組には櫻井氏もキャスターとして出演している。ニュース番組ではニュース番組らしくおとなしくまじめに振る舞い、バラエティ番組『嵐にしやがれ』ではバラエティ番組にふさわしくふざけるということに櫻井氏が何の問題も感じていないかというそうではなく、櫻井氏は村尾氏がゲストで来れば「ちょっとつらい」と言っている。櫻井氏がニュース番組でおとなしくまじめに振る舞っているのは「おとなしくまじめなスタイル」を選択してのことではなく(それならば番組内容に応じて別のスタイルに切り替えても何ら問題ないはずである)、『おとなしくまじめな人』キャラとしてのものであり、だからこそ、それが番組によって変わっていることが露見してしまい「こんな人だったのか」と思われることを考えると「ちょっとつらい」ということになる。

変えてはいけない、変わらないことになっている自己のキャラクタを意図的に操作していることが発覚すると、当然ながらマイナスの評価を受けることになる。次の(4)に挙げるのは、谷崎潤一郎の『細雪』の一節で、幸子^{きちこ}という女性が奥畑^{おくぼたけ}という人物を不愉快に感じていると記されている部分である。なぜ不愉快なのかというと、奥畑が乱暴者だとか不道徳だとかいうわけではない。奥畑のしゃべり方がいやにゆっくりしていて、大家の坊っちゃんのようなだからと述べられている。(ここでは地

の文が幸子の立場から述べられている。)

- (4) 平素の奥畑はいやにゆっくりゆっくりと物を云う男で、そこに何か、大家の坊々としての鷹揚さを銜う様子が見えて不愉快なのであるが、今日は興奮しているらしく、いつもよりも急ぎ込んだ口調で云うのであった。

[谷崎潤一郎『細雪』中巻, 1947.]

ところが奥畑は事実、没落しかけとはいえ大家の坊っちゃんであり、そのことは幸子も承知している。奥畑に対する幸子の不快感は、貧民のくせに大家の坊っちゃん然として、といった「身分詐称」によるものではない。また、余裕たっぷり育てられた大家の坊っちゃんである奥畑のしゃべり方が自然とゆっくりしていて、そこに鷹揚さが感じられるのが許せないということでもない。幸子が許せないのは、自身のゆっくりしたしゃべり方と、大家の坊っちゃんらしい鷹揚さとの結びつきを奥畑自身が意識した上で、それを是として、意図的にゆっくりしゃべっているということである。

もちろん奥畑は、そういう演出意図を決して露わにはしないだろう。他人から、ゆっくりしたしゃべり方や、それが醸し出す大家の坊っちゃん然とした雰囲気指摘されても、とぼけてみせるに違いない。だがそれは実は奥畑の演戯であり、ゆっくりしたしゃべり方には奥畑の秘められた意図があると幸子は見ている。もちろん、それは幸子の思い過ごしかもしれないが、思い過ごしであろうとなかろうと、幸子は己れの感覚を頼りに周囲の人物を判断して生きていくしかない。それは奥畑も、また我々にしても同じである。

『細雪』(中巻)にはもう一人、意図露出のかどで低評価に甘んじなければならない男性が登場する。洪水に遭った幸子たちを見舞うため、元・奉公人として取る物も取りあえず苦労して一番に駆けつけ、幸子に挨拶し、さらに幸子の娘の無事な姿に涙声で「よろしゅうございましたなあ」と話しかけるといふ庄吉は『忠義者』以外の何者でもないはずだが、幸子の目には次の(5)のように、単なる芝居好きの自己満足的な行為としてしか映らない。(ここでも先の(4)と同様、地の文は幸子の立場から書かれている。)

- (5) と、そこへ悦子が帰って来たので、まあ、娘ちゃん、よろしゅうございましたなあと、――平素から口数の多い、表情たっぷりの物云いをする男なので、――わざと鼻を詰まらせたような作り声を出して云った。

[谷崎潤一郎『細雪』中巻, 1947.]

息女の無事に安堵したからといって、声の調子をあからさまにコントロールして涙声にすると、このようにいくら善行を積んでも望む評価は得られず報われない。

「話し手は声の調子(たとえば速度や鼻音化度)をコントロールして、自分のきもちを相手に伝える」という考えは、話しことば研究においてしばしば唱えられる、いかにももっともらしい考えではある。だが、『細雪』の2例からわかるように、実は十全なものでは決してない。しゃべる速度が遅ければ『坊っちゃん』キャラが、鼻音化度が高く涙声であれば『忠義者』キャラが、「醸し出される」かもしれないが、それはあくまで声の調子をコントロールする意図が無い、もしくは有っても見えない場合のことである。

というのはそもそも、人間が社会生活を営む上で気にしていかにざるを得ないさまざまな評価のうち、最も肝心な人物評とは、「この石の形はおもしろい」のような自然物評の一種であって、「意図となじまない」という性質を持っているからである。

「あの映画はおもしろい」のような作品評は、その映画の制作者が「皆に『おもしろい』と思ってもらおう」と意図して努力してこの映画を作ったのだと判明しても、「おもしろい」のままである¹。また、「あいつは歌がうまい」のような技能評も、当の歌手が「皆に『歌がうまい』と思ってもらおう」と意図して練習してうまくなったのだと判明しても「歌がうまい」のままで傷つかない²。これらとは異なり、「あの人は『豪傑』だ」のような人物評は、その本人が皆に『豪傑』だと思ってもらおうと意図して、『豪傑』と思われそうなことをやってきたと判れば壊れてしまう。本人は何の意図もなくあくまでふつうにふるまっているその様子が端から見ると『豪傑』、というのが『豪傑』であって、そこに意図があっては(というより、見えては)ならない。同様に、「あの人は『坊っちゃん』だ」と言う時の『坊っちゃん』とは、ふつうに振る舞い、ふつうにしゃべっているのに端から見れば『坊っちゃん』という人物のことであり、『忠義者』とは、ふつうに振る舞い、ふつうにしゃべっているその振る舞いが、他人から見て『忠義者』のことである。本人はあくまでふつうであって、『坊っちゃん』だと思わせよう、『忠義者』と思われようといった意図は無い。いや、有ってもよいが、察知されてはならない。

日々繰り上げられるコミュニケーションを我々が観察する際、その表面的な部分だけでなく、「誰が『上』で誰が『下』か」「この人物は『坊っちゃん』か」「この人物は『忠義者』か」といった、コミュニケーション参加者たちにとって真に切実な部分をも観察しようとするのであれば、話し手があからさまに意図的に切り替え使いこなしてはばかることのない「スタイル」とは別に、そして、そもそも意図的に切り替えられない「人格」とも別に、意図的に切り替えられるが意図が及ばないことになっている「キャラクタ」という概念が必要である。

3. 予想される反論と再反論

以上のような形で「キャラクタ」という概念を新しく導入することには、或る反論が予想される。ここではそれらを紹介した上で、再反論をおこなしておく。

予想される反論とは、「変えてはならない、変えられないことになっており、キャラクタが一貫していないのはみっともない」という第2節の記述に反する場合がある、というものである。たしかに、キャラクタが一貫していなくても問題のない場合はある、だが、それは「遊び」の文脈であって、「通常」の文脈とはひとまず区別される。

「遊びの文脈でのキャラ変え」は、最近始まったことばの乱れ、というようなものではない。日本語話者は昔から、こういうことをずっとやってきたと言える。

たとえば檀一雄の『火宅の人』には、主人公(私)の愛人が、ふだんは女らしく振る舞っているのに、突然『ヤクザ』キャラを発動させて結婚を迫る(それを私が後になってから回想する)という、(6)のような場面がある。

¹ 作り手の人間性が問題になる芸術作品の場合は、例外的に意図が疎んじられ「自然体」が尊ばれることがあるが(詳細は定延(2011)を参照)、ここでは省く。

² 念のために言えば、低評価の場合も同様である。作品評「あの映画はつまらない」や技能評「彼は歌がヘタだ」は、「この映画はあえて『つまらない』と思われるものにしよう」「自分は歌がヘタなままでいたいから練習はするまい」といった意図が判明しても傷つかない。

- (6) 見たところあまり利口そうにも感じられないが、その実、大変に聡明だ。日常の会話と表現がバカに面白い。これは随分後の話だが、たとえば、突然、裾まくりしてアグラを組み、その両腿りょうももをかわるがわる打ちたたいて、
「おい？ どうする気だ？ いつオレをヨメに貰もらってくれんだよ？ ハッキリしなよ。一体、どうしてくれるんだ？」
その心にある焦燥を、突然、ユーモアで実演して見せるのである。
「おろした子が、ズラリと並んでさ、オレとそっくりのアグラをかいて、みんな一緒に凄すごんでるんだぞ。見えねえのかよ？」
それから調子がガラリと変り、
「フフフ……、アタシとそっくりの、短い足してるんだろう、ね？ 一さん」

[檀一雄『火宅の人』1961-1975.]

これは心の焦燥を「ユーモアで実演」したもの、つまり「遊び」というわけである。(もちろん、その底にある悲愴なものを檀氏が感じていないわけではないだろうが。)

また、太宰治の戯曲『春の枯葉』には、同じ家に暮らす若い男女(野中弥一・奥田菊代)が会話の中で突然「一じゃからのう」と、『老人』口調で嘆息してみせ合う次の(7)のような場面がある。

- (7) (菊代) ええ、でも、同じうちにいるけど、なかなか二人きりで話す機会は無いものだわ。あら、ごめん。誘惑するんじゃないわよ。
(野中) かまいませんよ。いや、よそう。兄さんに怒られる。あなたの兄さんは、まじめじゃからのう。
(菊代) あなたの奥さんだって、まじめじゃからのう。

[太宰治『春の枯葉』1946.]

いま述べたように、「遊び」の文脈では、キャラクターの変化は恥ずかしいことではない。だが、「遊び」だからといって、キャラクターの変化が無秩序に生じるわけではない。キャラクターの変化は原則として、コミュニケーション行動と連動する形で生じる。つまり、それぞれのキャラクターには得意とするコミュニケーション行動がある。話し手が或るコミュニケーション行動を繰り出そうとすると、それを「得意技」とするキャラクターが発動される。

先ほどの(6)の場合、愛人が『ヤクザ』の口調でしゃべっているのは、愛人が(冗談とはいえ)脅しを行っている場面である。脅しというコミュニケーション行動を得意とするのがヤクザであるから、愛人は『ヤクザ』キャラを発動させていると考えられる。また(7)の場合、若い男女が『老人』の口調でしゃべっているのは、彼らが「人間、そこまでまじめでなくても」という嘆息を行っている場面である。このような嘆息は、達観した老人が得意としそうであるから、彼らは『老人』キャラを発動させていると考えることができる。

このような発話行為とことばの関係が、作品の中で自覚的に触れられることもある。たとえば、椎名誠の自伝的エッセイ『哀愁の町に霧が降るのだ』には、主人公(椎名)が、それまでの「ぼく」口調から「おれ」口調に変わる、つまり『ぼく』キャラから『おれ』キャラに変わる場面がある。次の(8)を見られたい。

(8) そこでおれは静かに立ちあがった。もう『ぼく』なんて言っていられない。

[椎名誠『哀愁の町に霧が降るのだ』(上)1981.]

この変化は、主人公自身が「もう『ぼく』なんて言っていられない」と書き添えているように、そこで描かれている状況、そしてそれに応じて主人公が繰り出そうとするコミュニケーション行動に関係がある。この口調の変化は、主人公(椎名)が、それまで会話していた相手の態度に腹を立て、立ち上がって荒っぽいコミュニケーション行動に出ようとし、それを得意技とする「おれ」キャラが発動された結果だろう。

なお、同作には、再び自称詞が「おれ」から「ぼく」に変化する部分がある。これについて椎名は「男と女の愛の物語を書こうと思うから」と説明している。愛の物語を「おれ」で書いていこうとすると、出だしは霧の波止場で、というようにハードボイルドにキメていかねばならないが、恋愛に関する自分の行動(これもコミュニケーション行動である)を考えると、どうも「おれ」では合わない、というこたらしい。

同作の中で主人公(椎名)は、さらに別のキャラクタにも変化している。主人公(椎名)の友人の木村晋介は、司法試験合格を目指して、家の庭に専用のプレハブまで建ててもらって勉強しようとしている。その木村晋介に「みんなでアパート借りて共同生活しようよ」と言う行為は、誘惑以外の何物でもない。この暴挙を椎名はいかに行ったのか？ 椎名は(10)のように、木村に流し目でのじりより、「銭湯なんかに入って、将棋やってカツ丼食べましょうよ、ネエ」などとあやしく言い、木村のひざをつねった、とある。

(10) 「おまえも来いよ」

と、おれは木村晋介のプレハブ造りの勉強部屋で、すこしビールに酔いながら言った。

[中略]

「お酒を飲もうよ、毎日……」

流し目でのじりよった。

「銭湯なんかに入って、将棋やってカツ丼食べましょうよ、ネエ」

ひざを軽くつねった。

[椎名誠『哀愁の街に霧が降るのだ(上)』1981.]

これは、「誘惑」「お誘い」を得意技とする『水商売のお姉さん』キャラ(強烈な『女』キャラ)が発動されていればこそその振る舞いだらう。

まんまと共同生活に連れ込まれ、炊事役まで引き受けさせられた木村が、「ワイシャツが濡れて困るのでせめて割烹着を買ってくれ」と願い出て、椎名たちに聞き届けられる場面がある。木村は「うれしいわあ」と、「なかばやけくそ気味にシナを作ってみせた」という。ここで記述されている木村の振る舞いは、「割烹着を買ってもらえると喜ぶこと」をとりあえず得意技にしていそうな『主婦』キャラ(ほどほどに『女』で『年配』のキャラ)の発動によるものではないだろうか。

もちろん、一般の男性が『水商売のお姉さん』や『主婦』といった女性キャラを発動させることは、

遊びにせよ、親しい仲間うちの冗談以外ではふつうないだろう。『水商売のお姉さん』キャラや『主婦』キャラが発動しかかったところで、「いけない。男なのにこんなキャラクタを発動させたら、恥ずかしくてたまらない」とストップがかかる。このストップをかけるもの、いざそうなると恥ずかしくてたまらないもの、それは人格である。

「話し手が或るコミュニケーション行動を繰り返そうとすると、それを「得意技」とするキャラクタが発動される」という、コミュニケーション行動とキャラクタの連動は、このように多くの場合、人格の統制下にあり、連動は人格によって阻害されることがある。連動が「原則」だと先に述べたのは、この意味である。

先の愛人の例(6)といまの例(10)に関しては、さらに読者の注意を促したいことがある。それは、「コミュニケーション行動とキャラクタの原則的連動」と言う際の「コミュニケーション行動」には、しゃべること、つまり言語行動だけではなく、「アグラをかく」「左右の腿を叩く」「流し目をする」「にじりよる」「ひざをつねる」といった非言語行動も含まれるということである。つまり、キャラクタの変化はことばだけでなく身体全体に影響を及ぼすということである。

このことは、いまや世界的に有名になった日本のマンガにおける、登場人物のコマごとの「変身」を理解する上でも重要である(Sadanobu 2009)。たとえば、魔夜峰央の『パタリロ!』には、マライヒという人物をさんざんからかっていた主人公のパタリロが、マライヒから「つぶれアンパン」とひとこと反撃されると、自分のそれまでの振る舞いを棚に上げて、それにいちやもんを付けるという場面がある。(図1を参照。左側の人物がマライヒで右がパタリロ。)

パタリロは子供でふだんは共通語をしゃべるが、いちやもんをつけるコマでは、「えらい言われ方やんけ われ」と関西弁をしゃべっている。その頬には刀傷ができており、キセルタバコ、サングラス、派手な柄のコートなど、或る種の関西ヤクザを思わせる姿に変身している。そして、後続のコマでは何事もなかったかのように、元の子供の姿に戻り共通語をしゃべっている。

このような「変身技法」は、日本のマンガを手にする海外の読者にとっては、不可解な謎に違いないが、これもコミュニケーション行動とキャラクタの原則的連動の現れとして理解できる。いちやもんをつけるにあたって、パタリロは、いちやもんつけを得意技とする『ヤクザ』(この例の場合は『関西ヤクザ』)キャラを発動させ、これが言語-非言語行動の全面に影響したというのが問題のコマであろう。このように、キャラクタの発動は、マンガではことばだけでなく、身体にも及ぶことがある。

類例を挙げる。図2に挙げるのは、^{いちまる}一丸の『あんこ坂のお医者さま』の連続する2コマである。図2左のコマでは、若い女医が老練な看護婦に耳の痛いことを言われており、それに対する反応が図2右で描かれている。そこでは女医は、三頭身の幼児体型になり、回転イスの上で回転しながら、「わかりましたよ〜〜い」という幼児じみたことばを発している。



図1: ヤクザの口調, 風体の子供(パタリロ) (右側)
[魔夜峰央 (1980)『パタリロ!』4, 白泉社, p. 11.]



図2: 女医の普段の姿(左)と、三頭身で回転しながら幼児じみたことばを発する姿(右)

[一丸『あんこ坂のお医者さま』第43話 (2004)『ビッグコミックオリジナル』第31巻26号, 215, 小学館.]

このような「変身」は、女医がいじけるに際し、いじけを得意とする『幼児』キャラを発動させ、それがことば・しぐさ・身体に及んだものとして理解できるだろう。

もちろん、変身技法を取り入れておらず、登場人物がコマごとに变身しないマンガは現在の日本にも少なくないが、そこに見られることばの変化は、やはりコミュニケーション行動とキャラクタの原則的連動の現れとして理解できる。たとえば藤子・F・不二雄の『ドラえもん』には、ドラえもんをだまして未来社会のグッズを手に入れた野比のび太が悦に入り、誰もいないところで「これはたいへんなものですよ」と、丁寧な口調でひとりごとを言う場面がある。(図3を参照。図中のカバンと手袋が未来社会のグッズである。)



図 3: 丁寧な口調でひとりごとを言う野比のび太
[藤子・F・不二雄『ドラえもん』第7巻, 小学館, p. 159.]

この丁寧口調を理解するには、「のび太は自分が手に入れたものを品定めするにあたって、品定めを得意技とする『専門家』あるいは『評論家』のキャラクタを発動させてそれらしく鑑定してみせることで、自分の喜びを倍加させようとした」という想定が有効ではないだろうか。丁寧口調のひとりごとは、専門家や評論家は品定めにおいて丁寧にしゃべる(というイメージがある)ので、のび太のひとりごと丁寧な口調になったということである。『ドラえもん』は古典的なマンガであって、変身技法は採用されていないが、もし採用されていれば、のび太はこのコマだけ、たとえば髪をオールバックになでつけてパイプをくゆらしたり、あるいは(テレビによく登場する某鑑定士のように)和服姿でチョビヒゲをはやしていたりといった、専門家・評論家らしい知識層の中老年男性の姿に変身していてもよいところだろう。

最後に、この第3節で述べてきた、遊びの場面でのことばについて付言しておく。ここで取り上げた遊びの場面でのことばは、登場人物または著者のふざけによる、一種の冗談として発せられている。(だからこそ「遊びの場面」である。)冗談というものは、「わざと言っている」ということが皆にわからないかぎり冗談として成立しないから、「冗談として」の部分は「あからさまに意図的に」と言い換えることもできる。たとえば「えらい言われ方やんけ われ」といちゃもんをつけるパタリロは、冗談発話として、つまり「関西ヤクザらしくしゃべろう」という意図をあからさまにして、関西ヤクザらしい物言いをしている。その点で、パタリロの関西ヤクザらしい物言いは、我々が状況に応じて選択し、使い分ける「スタイル」と言える部分もないわけではない。しかし、同時に忘れてはならないのは、その際に利用されているのが『関西ヤクザ』というキャラクタの非意図的で自然なしゃべり方だ、ということである。

ここで、「意図の有無」を2つのレベル(仮に「基層レベル」「応用レベル」と呼ぶ)に分けて考えると、整理がつきやすいかもしれない。『関西ヤクザ』は関西弁をしゃべり、関西的な振る舞いをするにあからさまな意図を持たない。ただ自然に振る舞っているだけである。まず「基層レベル」

として、このような『関西ヤクザ』というキャラクタのしゃべり方を認めないわけにはいかないだろう。

冗談発話はこれを「応用レベル」で、あからさまに意図的に利用してできあがっているものであり、「基層レベル」では発話キャラクタ、「応用レベル」ではスタイルという、合わせ技とも言える。

冗談発話に「スタイル」が関わってくるということは否めないが、『関西ヤクザ』はまず「スタイル」ではなく「キャラクタ」としてあり、冗談発話はそれを利用してできているということである。

4. ことばとキャラクタの関わり方

第2節・第3節では、さまざまな例を通して、目的論的な発話観の根底にある意図性の前提が必ずしも妥当せず、コミュニケーションの観察にキャラクタ概念を導入する必要があるということを示した。これを踏まえて本稿後半では道具的な言語観を検討するが、そのための準備として、この節では、ことばとキャラクタの関わり方を整理しておく。

ことばとキャラクタの関わり方は一様ではなく、少なくとも3つの関わり方がある。

第1の関わり方は、ことばがキャラクタを表すというものである。たとえば、或る男性について、その人物がたとえ年輩でも「あの人は『坊っちゃん』だ」「あいつは『子供』だ」などと評することがあるだろう。この時、『坊っちゃん』『子供』といったことばは、その人物の自己中心的あるいは幼児的なキャラクタを直接表している。

ことばとキャラクタの第2の関わり方は、ことばが、そのことばの内容だけでなく、そのことばを発する話し手のキャラクタをも暗に示すというものである。「そうじゃ、わしが知っておる」は老博士のことば、「そうですわよ、わたくしが存じておりますわ」はお嬢様のことば、といった金水 (2003)の指摘は、この関わり方についてのものである。金水 (2003)ではこのようなことばは「役割語」と呼ばれており、本稿でもこれを踏襲する。役割語の定義を(11)に挙げておく³。ここでは「役割語」が、「役割」という名こそ付いているものの、目的論や道具論とは直接関係しない形で定義されているということに注意されたい。

- (11) ある特定の言葉づかい(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物像(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。

[金水 2003: 205.]

ことばとキャラクタの第3の関わり方は、動作を表現することばが、その動作をおこなうキャラクタまでを暗に示すというものである。たとえば、或る人物について「たたずんでいる」などと言えば、その人物がそれなりの雰囲気具备了『大人』キャラであることが暗に示される。いくらじっと黙って立ち続けても、マンガ『サザエさん』のタラちゃんは「タラちゃんがたたずんでいる」とは表現しにく

³ 一般に「役割」は「機能」「はたらき」と似て多分に目的論的なことばであり、何らかの目的を前提とする。「ハサミの役割」を訊ねられれば「紙や布を切ること」などと即答しやすいが、「夕闇の役割」「21歳の役割」などを問われれば詰まってしまうのはそのためである。だが、(11)を見るかぎりでは、「役割語」という専門用語は、名称に「役割」ということばこそ含んでいるものの、目的論から切り離された形で定義されているということに注意されたい。したがって、目的論的な発話観や道具的な言語観を乗り越えようとする本稿の中で「役割語」が論じられることに矛盾は無いだろう。役割語と発話キャラクタについてはさらに金水 (2011)も参照されたい。

いだろう。同様に、「ニタリとほくそ笑む」のは『悪者』キャラである。桃太郎のような正義の味方や良妻賢母は、「笑みがこぼれる」ことはあっても「ニタリとほくそ笑み」はしない。「ニタリとほくそ笑む」のようなことばを「キャラクタ動作の表現」と呼び、これらキャラクタ動作の表現によって示される『大人』キャラのようなラベルづけられたキャラクタを「表現キャラクタ」と呼ぶ。

これらの関わり方を表にまとめると次の表 2 のようになる。

ことば	関わり方	キャラクタ
キャラクタのラベル (例:「坊っちゃん」)	ことばがキャラクタを直接表す。	ラベルづけられたキャラクタ (例:自己中心的なキャラクタ)
役割語 (例:「そうじゃ、わしが知っておる」)	ことば内容だけでなく、ことばの発し手のキャラクタを暗に示す。	発話キャラクタ (例:老人キャラ)
キャラクタ動作の表現 (例:「ニタリとほくそ笑む」)	ことばが動作だけでなく、動作の行い手のキャラクタを暗に示す。	表現キャラクタ (例:悪い奴キャラ)

表 2: ことばとキャラクタの 3 つの関わり方

夏目漱石の『坊っちゃん』(1906) は、文字どおりの坊っちゃん、つまり男児の物語ではなく、中学校の教員の物語である。ここでは『坊っちゃん』とはその先生の自己中心的で幼児的なキャラクタを指す「キャラクタのラベル」である。

太宰治の『春の枯葉』(1946)では、若い男女が「〜じゃからのう」と『老人』キャラでふざけている。このキャラクタは発話キャラクタであり、「〜じゃからのう」ということばは「役割語」である。

林芙美子の『放浪記』(1930)では、『勇ましい男』のはずの恋人が親の前では「眼をタジタジとさせ」「オドオドした姿」だとなじられている。男性の恥ずかしいキャラ変わりは「表現キャラクタ」の変化として描かれており、これらのことばは「キャラクタ動作の表現」である。

第 2 節で「A 子ったら、すごい怒っちゃって、キャラ変わってんの(笑)」「学校では『姉御』キャラで通してるけどバイト先では実は『妹』キャラ」などと例示した、人間のあり方を指す日常語「キャラ(クタ)」が日本語社会に普及したのは比較的最近のことであり、この日常語を口にする話者も若い年代に偏っている。しかし、本稿のように専門用語として「キャラクタ」を定義すると、ことばとキャラクタの関わりは最近の流行というようなものではなく、少なくとも以上の 3 つの形で、昔からあったということになる。

なお、上では 3 つの関わり方を一つ一つ取り上げたが、これら 3 つの関わり方が重なることも珍しくはない。むしろそれがふつうである。たとえば冷徹無比な世界的狙撃手・ゴルゴ 13 は、殺人依頼者に対して「つまり狙撃の標的は幼児性が強い男だな」とは言えても、「つまり狙撃の標的は『坊っちゃん』だな」とは言えない。また、「奴ならそこで少し笑はずだ」とは言えても「奴ならそこでニタリとほくそ笑むはずだ」とは言えない。ゴルゴ 13 の口から「坊っちゃん」「ニタリとほくそ笑む」などという世俗的なことばが漏れ出した瞬間、ゴルゴ 13 のクールで超俗的なカリスマ的な(つまり「格」の高い)キャラクタがこわれてしまう。つまり「坊っちゃん」ということばは、キャラクタのラベルであると同時に役割語でもある。同様に「ニタリとほくそ笑む」ということばは、キャラクタ動作の表現であるだけでなく役割語でもある。

5. 道具的な言語観の批判的検討

一人の発話者のことばづかいが、場面や相手、発話内容によってさまざまに変わるという現象（ことばの個人内変異）は、程度の差こそあれ、ことばやコミュニケーションの研究分野では広く認識されており、しばしば「発話者は場面や相手、発話内容に応じて適切なスタイルを選択してことばをしゃべるのだ」と説明されている。

この「スタイル選択」という意図的な概念一辺倒の説明がうまく当てはまる場合はもちろん有る。だがここで指摘したいのは、その一方で、「人格」の変化という非日常的な事例を除き、考察範囲を日常的なコミュニケーションに限定したとしてもなお、ことばの個人内変異が「スタイル選択」だけでは説明できない場合もまた有るだろうということである。それは、状況の流れの中で「思わず」あるいは「知らず知らずのうちに」発話者のキャラクタ（つまり発話キャラクタ）が変わり、発することば（役割語）が変わってしまうという場合である。

たとえば、「A 子ったら、すごい怒っちゃって、キャラ変わってんの(笑)」などと他者に嘲笑されるキャラ変わりは(第2節)、そのキャラ変わりが当人(A子)の意図によるものでないからこそ嘲笑されるのだろう。

またたとえば、ふだんは『姉御』キャラ(『格上』の『女』)で通している話し手が、もっと強烈に『姉御』キャラを発動させている相手との会話では、『妹』キャラ(『格下』の『女』)を発動させるといった場合である。話し手が発動させる発話キャラクタは人格によって統制される部分もあるが(第3節の(10)の説明箇所を参照)、このようにやりとりの中で調整され決まっていくものでもある。発話キャラクタを一つだけで通すことができない最大の原因はここにあるのだろう。

以上のような事例は、我々の日常を顧みれば誰しもすぐ思い当たれることであって、ことばの個人内変異を説明する際に「人格」「スタイル」に加えて「発話キャラクタ」が必要という本稿の考えにこれ以上特に説明が必要とは思われない。但し、「発話キャラクタが変わる」「役割語が変わる」ということが何を基準に「変わる」と判断されるのかは、できるだけ明確にしておく必要があるだろう。そこで本節以下では、発話キャラクタの具体的内容について、現時点での筆者の考えを示しておく。

5.1 発話キャラクタの2分

発話キャラクタは、「発動のされ方」「あり方」「ことばの実態」の3点から、2つのタイプ(『私たち』タイプと『異人』タイプ)に分けられる。『私たち』タイプとは『現代日本語(共通語)社会の住人』タイプと言ってもよく、たとえば『大人』『娘』『幼児』『老人』などであり、『異人』タイプとは、たとえば『宇宙人』『平安貴族』『関西人』などである⁴。

まず「発動のされ方」について。発話キャラクタが発動される実態を考えると、そこには「本来」的な発動と、そうでない「臨時」的な発動がある。たとえば、或る若者は、「本来」の『若者』らしい発話キャラクタを発動させてしゃべりながら、時に遊びの文脈などで「臨時的」に、「あの人はまじめじゃからのう」のように『老人』っぽくしゃべったり、「明日も会議でおじゃるよ」のように『平安貴族』っぽくしゃべったりするかもしれない⁵。このうち『老人』キャラは、別人(たとえば或る老人)にと

⁴ 『関西人』が『異人』タイプに属しているのは、ここで観察しているのが現代日本語共通語の発話キャラクタだからに他ならない。仮に現代日本語関西語を記述すれば、『関西人』は消失し(つまり『私たち』になり)、代わって『異人』タイプに『東京人』が現れることになる。

⁵ 金水(2003)で述べられているように、「おじゃる」は室町時代から江戸時代にかけての京都の庶民のことばであ

っては「本来」的に発動されるものであり得るが、『平安貴族』キャラの発動を「本来」的な発動とする者はいない。このように、『私たち』タイプの発話キャラクタの発動は「本来」的な発動があり得るのに対して、『異人』タイプの発話キャラクタの発動は「本来」的な発動があり得ず、専ら「臨時的」な発動に限られる。

次に「あり方」について、『私たち』タイプの発話キャラクタがびっしり稠密^{ちゅうみつ}にひしめき合っているのに対して、『異人』タイプは散発的にしか存在しない。たとえば『平安貴族』という発話キャラクタはあるが、『平安庶民』という発話キャラクタは無い。『奈良貴族』も『室町貴族』も、発話キャラクタとしては無い。もちろん、現実には平安庶民や奈良貴族、室町貴族は存在していたが、彼らのしゃべり方は特定のキャラクタの話し方(つまり役割語)として現代日本語社会に定着してはいない⁶。発話キャラクタとしてはただ『平安貴族』があるだけで、その周囲はない。「散発的」とはこうした事情を指す。

『異人』タイプとは違って、『私たち』タイプの発話キャラクタは、隙間無くびっしりと稠密に分布している。これは2次元の紙にたとえて言うなら、紙の上のどの点を指しても、その点の位置(縦の値、横の値)に応じた発話キャラクタが必ず見つかるということである。この紙のたとえでは「縦」「横」という2つの尺度が重要だが、発話キャラクタの場合はそれが「品」「格」「性」「年」という4つの尺度にあたる。稠密でない『異人』タイプの発話キャラクタはひとまず措いて、稠密な発話キャラクタの特徴をとらえようとする、この4つの尺度が重要になる(第5.2節で後述する)。

最後に「ことばの実態」について。たとえば、『私たち』タイプの発話キャラクタの役割語を観察すると、『男』と違って『女』は体言の文を好む」という傾向が見いだせる。これは、『男』なら「雨だよ」と言うところで、『女』は助動詞「だ」なしで、むきだしの体言「雨」に「よ」を付けて「雨よ」と言う、といったことである。ところが『異人』タイプには同じ傾向が成り立たない。『江戸っ子』の場合、体言「あたりまえ」に「よ」を直接付けて「あたりめえよ」と言うのは『男』であり、むしろ『女』が「あたりまえだよ」と言う。またたとえば、『私たち』タイプの発話キャラクタの役割語を観察すると、「文末の「わ」は『女』っぽい。少なくとも『男』っぽくない」という傾向が見いだせる。ところが、ここに『異人』タイプを混ぜてしまうと、「おのれ、目にももの見せてくれるわ」などと言う『侍』が観察をかき乱してしまう。このように、『私たち』タイプと『異人』タイプは、ことばの実態も異なっている。

以上3点をまとめると、次の表3のようになる。

この結果により、『私たち』タイプと『異人』タイプを分け、特に『私たち』タイプを集中的に観察すると、このタイプの大体の特徴は、「品」「格」「性」「年」という4つの尺度に基づいて記述できる。それぞれの尺度ごとに、その尺度上でとり得る代表的な値をまとめれば(12)のようになる。(「品」「格」「性」「年」については第5.2節以降で紹介するが、それまでは日常用語「品」「格」「性」「年」と理解しておいて差し支えない。)

り、現実の平安貴族は「ーでおじゃる」などとはしゃべっていなかったが、これが『平安貴族』キャラの役割語であることは否定できない。『平安貴族』キャラの役割語は、現実の平安時代の貴族のことばとしてではなく、現代日本語社会におけるイメージ上のことばとして追求しなければならない。

⁶ 直前の注5を参照されたい。

	『私たち』タイプ	『異人』タイプ
発動のされ方	「平常時」に発動	冗談などで一時的に発動
あり方	稠密(例:ちよつと『女』〜かなり『女』〜すごく『女』)	散発的(例:『平安貴族』は有るが『平安庶民』『室町貴族』は無い。)
ことばの実態	体言(例:「雨」)+「よ」は『女』	『江戸っ子』は男が「そうよ」、女が「そうだよ」

表 3: 『私たち』タイプと『異人』タイプの 3 点の違い

(12) 『私たち』タイプの発話キャラクタを記述するための 4 つの尺度と値

「品」:『上品』〜無指定〜『下品』

「格」:『別格』〜『格上』〜無指定〜『格下』〜『ごまめ』

「性」:『男』〜無指定〜『女』

「年」:『老人』〜『年輩』〜無指定〜『若者』〜『幼児』

『私たち』タイプの発話キャラクタは、これら 4 つの尺度の値の組み合わせで、大体的特徴が記述できる。(なお、尺度の値の中に「無指定」とあるのは、当該の発話キャラクタにとってその尺度が重要ではなく、その尺度上の値が特に指定されない場合のためのものである。)

4 つの尺度に含まれていないものは多い。たとえば「美醜」という尺度は、世に「美人論」や「ブス論」が絶えないように、キャラクタを考える上では重要なもので、キャラクタとして『美人』キャラや『ブス』キャラは認める必要があるだろう。だが、「発話キャラクタ」は「キャラクタ」の一種であって、両者は同じではない。たしかにキャラクタを論じるにあたっては実にさまざまな観点が必要だが、発話キャラクタについては、そのうち一部の観点だけで済む。『美人』キャラと『ブス』キャラで、話すことばが違うわけではない⁷。したがって「美醜」という尺度はここでは挙げていない。

「善悪」という尺度も、キャラクタ一般を考える際には必要であり、さらに、表現キャラクタにとっても必要である(なぜなら、すでに見たようにたとえば「ニタリとほくそ笑む」という動作は『悪者』キャラ限定の動作だからである)が、発話キャラクタとしての必要性はそう高くない。次の(13)は、このことをよく示している。

(13) a. げっへへ、これでよお、罪もない市民をよお、救えるってえ寸法だぜ。

b. げっへへ、これでよお、罪もない市民をよお、殺せるってえ寸法だぜ。

内容に関しては、罪もない市民の救済を歓迎する文(13a)が善、市民の殺害を歓迎する文(13b)が悪であって、2 つの文は大きく異なる。しかし、しゃべり方としては「げっへへ」にせよ「よお」にせよ「ってえ寸法だぜ」にせよ、『下品で、格が極端に高くはない、年輩の男』あたりを思わせるという点で2つの発言は違わない。もちろん、「内容」と「しゃべり方」の線引きは微妙な場合も少なくないし、フィクションでは「良い者は上品に、悪者は下品にしゃべりがち」という傾向はあるかもしれない

⁷ 『美人』キャラは「わたくしが存じておりますわ」、『ブス』キャラは「あたいが知ってたよ」など、読者はそれらしいことばの違いに思い当たられるかもしれないが、それは「美醜」の違いではなく「品」の違いである。美しくても下品な話し手は「あたいが……」としゃべり、醜くても上品な話し手は「わたくしが……」としゃべる。

が⁸、善悪がしゃべり方に直接関与するとは考えにくい。

以下、4つの尺度を一つずつ紹介する。

5.2. 発話キャラクターの「品」

ここで言う「品」とは、日常用語としての「品」として変わらず、巷間の人間に想定される尺度である。当該社会の文化的制約から逸脱せず、その中におとなしく、慎み深く、控えめにおさまるが、その行動はあくまで自由で美しく見え、制約を感じさせないのが『上品』であり、そうでないのが『下品』である。

発話キャラクターの『私たち』タイプにとって以上のような「品」の尺度が重要だというのは、さまざまな「上品」な語句、「下品」な語句の存在以外にも理由がある。それは、直接引用に関する制約が『上品』なキャラに見られるということである。次の(14)(15)を見られたい。

- (14) a. げっへへ、そんなわけですよ、お嬢様はよう、オイラに頼まれたというわけよ。
b. げっへへ、そんなわけですよ、お嬢様はよう、「あなたにお願いしますわ」っておっしゃったというわけよ。
- (15) a. その方、笑って引き受けて下さいましたわ。
b. その方、「げっへへ、もちろん引き受けやすぜ」っておっしゃいましたわ。

『上品』な令嬢が『下品』な男に頼み事をした際の様子を後日、『下品』な男が仲間に語る場合、(14a)は問題なく自然で(14b)も自然である⁹。しかし、男の快諾を語る『上品』な令嬢の発言としては(15a)は自然だが(15b)は不自然である。つまり直接引用が可能かどうかは、発話キャラクターの「品」に関わる問題である。『下品』なキャラクターは、自分と異なる『上品』なキャラクターの発言を、『上品』な人間の物言いとして直接引用できるが、『上品』なキャラクターは、『下品』なものと触れ合ってはならないので、自分と異なる『下品』なキャラクターの発言を、『下品』な人間の物言いとして直接引用できない^{10 11}。

5.3. 発話キャラクターの「格」

「格」とは、経験や力や地位などから総合的に醸し出されるものであり、「格」の最上位(『特上』)を持つ発話キャラクターとしては『神』がある。ここでの『神』とは、恋愛沙汰を繰り返す、神話に登場する「人間臭い」神々ではなく、天から声だけ降って来る、どこまでもおごりかな存在の『神』を指している。

こういう『神』は『下品』ではなく、かといって『上品』というのもしっくり来ないように、「格」は「品」とは(紛らわしいことも多いが)別物である。「品」とは何よりも巷の人間に想定される概念だが、「格」はそうではない。「うー」と大声で驚いたらガタ落ちになる、驚くなら「おや」「あら」などと小声で、それも下降調イントネーションで驚くべし、というのは「品」の問題である。「うー」だけでなく、「お

⁸ 本稿は「良い者のしゃべり方」「悪い者のしゃべり方」の差が傾向として存在することまでを否定するものではない。実際、傾向としての違いはありそうである。勅使河原 (2004) を参照。

⁹ ここで想定されている話し手がただの『下品な男』であって、女性ことばなど口にしそうにない『重厚な(格の高い)下品な男』とはかぎらないということに注意されたい。

や「あら」などと驚いても『神』ならおかしい、そもそも驚くことじたいできないはずというのが「格」の問題である。「げっへへ」と笑うのは悪いが「ふふふ」ならよいというのは「品」の問題で、そもそも笑うのはおごそかな『神』としておかしいというのは「格」の問題である。つまり驚き方や笑い方という行動のやり方は「品」の問題であり、驚くこと、笑うことという行動それじたいは「格」の問題である¹⁰。

ことばを発するキャラクタ(『私たち』タイプ)の「格」の値は、4 類(上から『別格』『格上』『格下』『ごまめ』)に大別できる。

「格」が最高値の『別格』である『神』は、さまざまな禁忌を持つ。「それでよい」とは言えるが「それでええ」「Ok.」「それでいいです」などが不自然なように、方言・外国語はもとより、丁寧なスタイルの発話はできない。「オーケー」のような外来語も原則としてしゃべらない。「上品なキャラクタは下品な発言を直接引用できない」と先に述べたが、「品」とよく似たことは「格」についても観察でき、たとえば「思い出してみるがよい。汝は『わかった』と答えたであろう」における「わかった」の直接引用は違和感をもたらしがちである。

「格」が『別格』ではなく『格上』の話し手は『神』とは異なり、「それでだな、私がだな」のように文節末で間投助詞などを発することができるが、「おこめ券」のような世俗的な語彙や、「はとぼっば保育所」のような幼児色の濃い語彙は『神』と同様、発することはできない。重々しい声が期待されている点も『神』と同様である¹¹。

なお、『格上』『格下』は地位の上下とは一応別物である。部下が上司に「これは失礼をいたしました」と詫びるその声が深くゆったりと落ち着いており、詫びられている上司がイラつく、ということがあるように、下位者には『格下』が期待されるがその期待は裏切られることもある。

「格」の最低値『ごまめ』は、『みそっかす』あるいは『おまめ』と言い替えてもよい。もともとこれらの語は、同じ地域の子供たちが遊ぶとき、ひときわ年齢が低く足が遅いなどの事情で、鬼ごっこをしても何をしてもうすぐつかまってしまうので、「タッチされても鬼にならない」といった特別措置が適用された子供のことを指しており(cf. 菅原・中島 2006)、ここではそれを「格」の最低値を表す専門用語として採用している。「格」が『ごまめ』のキャラクタは、典型的には「年」が『幼児』で、『別格』と同様、丁寧なスタイルを持たず、もっぱらぞんざいなスタイルでしゃべる。それで仕方ないものと赦され、無邪気でいいと認められている。

5.4. 発話キャラクタの「性」

たとえば男女共同参画社会基本法や改正・男女雇用機会均等法が施行されるといった、新しい動きは日本にもあるが、その一方で、性に関する伝統的な通念・期待というものが依然として存続していることも確かな事実であり、日本語社会はまさにその通念・期待に大きく寄りかかっている。

通念・期待というのは『男』は『女』よりも「格」が上、そして『女』は『男』よりも「品」が上という

¹⁰ 「品」「格」に対する読者の理解を促進すると思えるので、ここでは両者の違いを「行動のやり方の問題」「行動それじたいの問題」と説明した次第だが、もちろんこのような説明は、「行動」のとらえ方次第では漠然としてしまう。たとえば美しい立ち居振る舞いのような『上品』な行動や、猥褻・破廉恥で『下品』な行動については、「行動のやり方」ではなく「行動それじたい」が「品」の問題である。本文で言う「行動」とは、たとえばお茶を飲むことのような、それ自体、『上品』でも『下品』でもない、「品」に関して中立的な行動とする。

¹¹ 落語『次の御用日』において追求されている面白さも、裁きの場において、いかめしい奉行が、奉行に似つかわしくない甲高い声を出すといった、「格」の違反と考えることができる。

ものである。「おごそかな『神』(の声)」という第 5.3 節の記述に接して、女神をイメージした読者がどれだけいるだろうか。また、「げっへ〜」と『下品』に笑う人物といえ、まず『男』が思い浮かぶように、「下品」なことばは『男』のことばに偏っており、「男のような口をきく」とは、下品な、つまりそれだけ『男』に近い『女』のしゃべり方である¹²。

いま述べた「品」「格」との結びつきとは別に、『男』と『女』には大きな違いがある。それは第 5.1 節で触れたように、特に『女』だけが体言の文を好むということである¹³。たとえば、降り始めた雨に気が付いたという状況で「あ、雨」と言うのはふつつ『女』か『子供』だろう。少なくとも『男』っぽい言い方ではない。文「あ、雨」は名詞「雨」を述語としており、名詞とは最も典型的な体言であるから、この文は体言の文である。『男』なら、そもそも文の出だしで「あ」と言うかという問題は措いても、この状況では「雨」よりは「雨だ」だろう。ここでは名詞「雨」に助動詞「だ」が付いており、それだけ文は体言の文らしくない。「特に『女』だけが体言の文を好む」とは、このようなことを指す。

外の天気を人に教えてやる場合も同じである。『女』なら「雨よ」と言うが、『男』なら助動詞「だ」を付けて「雨だよ」と言う。「雨だぞ」「雨だぜ」の方が『男』っぽい、いずれにしろ「だ」が付いている。また、「外は雨だ」と言う人に同意する場合、『女』なら「雨ね」と言うが、『男』なら助動詞「だ」を付けて「雨だね」と言う。「雨だな」と言えばさらに『男』っぽい、これも「だ」が付いている¹⁴。

「きれいな色」「大変な事態」のように、体言の中でも「きれい」「大変」などは直後に「な」が付く点で名詞とは区別され、形容名詞などと呼ばれることがあるが、やはり同様である。「色がきれい」「まあ、大変」のように、『女』は体言の文をしゃべる。そもそも『男』が「きれい」などとロマンチックなことをしゃべるか、「大変」などと大騒ぎするか、という問題に目をつぶれば、「色がきれいだ」「大変だ」のように、『男』は「だ」を付けてしゃべる。

では、述語が動詞の場合はどうか。子供に「カマキリって飛ぶ？」と訊かれて、「飛ぶよ」と答えるか、「飛ぶのよ」と答えるか。『男』なら「飛ぶのよ」は難しく、「飛ぶのよ」は『女』に偏っている。動詞「飛ぶ」は最も典型的な用言、つまり体言とは対極にあるものだが、「飛ぶ」に「の」が付いて「飛ぶの」になると体言っぽくなる。

形容詞の場合も同様である。「これ、熱い？」と訊かれて答える場合、「熱いよ」と比べて、「の」が付いた「熱いのよ」は『女』っぽい。

『女』が文を体言らしくする手だては、「の」だけではない。今日は欠席だと告げた後、頭が痛い理由を付け足すところで「もん(もの)」を付けて、「今日は欠席よ。頭が痛いんだもん」のように言うのも、やはり『男』っぽくない。『男』なら「それは大変だ」と驚くところで、「こと」を付けて、「それは大変なこと」と驚くのも『女』である。このように、『男』っぽさを減じ、『女』っぽさを増す「の」「もの」「こと」は、今では文末のことばとして通用しているが、「それはあの人のです」「それはあの人のものです」「それはあの人がしたことです」に見られるような名詞(あるいは準体助詞)としての性質も

¹² 発話キャラクタだけではなく、表現キャラクタについても同様に、『男』と「格」の高さ、『女』と「品」の高さが観察できる。「貫禄／風格がある」「恰幅／押し出しがいい」「堂々としている」「重厚な」といった、「格」の高さを思わせることば(キャラクタ動作の表現)は、表現される人物像(表現キャラクタ)として『女』よりも『男』を想起させる。逆に、「しとやか／優雅／優美な」といった、「品」の高さを思わせることば(キャラクタ動作の表現)は、表現キャラクタとして『男』よりも『女』を想起させる。またたとえば、伝統的な京都のことば、いわゆる京ことばは、『上品』と評されたり、『女性的』と評されたりする。同じ一つのもの(京ことば)に対するイメージ「上品」と「女性的」は、つながっているのではないだろうか。

¹³ 益岡・田窪 (1995), 金水 (2003), 定延 (2011) を参照。

¹⁴ ここでは「よ」「ぞ」「ぜ」「ね」「な」の違いには触れない。

残しており、皆、体言としての性質が強い。『男』が助動詞「だ」と結びつきやすいということは、文節ではさらにはっきりするが、ここでは省く。

5.5. 発話キャラクタの「年」

まず最高値の『老人』から述べる。たとえば「それがのう」の間投助詞「のう」が『老人』のことばであって、特に『男』『女』を感じさせないように、『老人』のことばには『男』『女』の別が無い¹⁵。また、たとえば「お願いですじゃ」「お願いしますじゃ」が相当数の人にとって自然であるように『老人』の「じゃ」は「です」「ます」の文の末尾に現れ得る。この点で『老人』の「じゃ」は(『私たち』タイプではないが)『田舎者』の「だ」と似ている。一般に『老人』と『田舎者』のことばは似ているが、両者はまったく同じではない。たとえば、「駐在さんや」のように「ーや」で呼びかけたり、「ここにありますぞ」「本物ですぞ」のように丁寧体で「ーぞ」としゃべったりするのは『老人』ではあるが『田舎者』は必ずしもそうではない。またたとえば夏の盛りに「あづぐで、あづぐで、おら、なんも、わがんね」などと言うのは『田舎者』の老若男女であって、『老人』とはかぎらない。

『老人』のことばと同様、「年」の最低値『幼児』のことばにも『男』『女』の違いが無い。『老人』が助動詞「じゃ」「です」をしゃべるのに対して、『幼児』は周遍的な助動詞「でちゅ」あるいは「でしゅ」をしゃべり、そこに『男』『女』の区別は見られない。

「でちゅ」「でしゅ」は「です」とはやや異なり、動詞にも抵抗なく付き、それだけ汎用性が高い。名詞(たとえば「お昼寝」)や形容詞(たとえば「ねむい」)に関しては、「です」「でちゅ」「でしゅ」いずれも付くので特に差はないが(「お昼寝です」「ねむいです」,「お昼寝でちゅ」「ねむいでしゅ」),たとえば「食べるでちゅ」「わかったでしゅ」が自然であるように、「でちゅ」「でしゅ」は動詞(「食べる」「わかった」)にも抵抗なく付く。

これは実は『幼児』の「でちゅ」「でしゅ」にかぎったことではない。「食べるでおじゃる」「食べるでござる」「食べるざます」「食べるっす」などがそれなりに自然であるように、『平安貴族』の「でおじゃる」,『侍』の「でござる」,『上流婦人』の「ざます」,『体育会系』の「っす」なども動詞に付く。これに対して「です」は動詞には付きにくい。まったく付かないわけではなく、下の(16)のようなものはあり、やはり話し手としてそれなりに特定の発話キャラクタ(「格」や「年」が低い、やや『幼児』に近い発話キャラクタではないか)を思わせるが、「食べるでちゅ」「わかったでしゅ」ほど広く認知されてはいない。

- (16) a. そのあと相原君、北川君のふたりは一緒に飲みに行っただと思います。ぼくは帰ったですけど。

[松本修『探偵! ナイトスcoop アホの遺伝子』(ポプラ社, 2005.) 桑原尚志氏の文章の引用部分.]

- b. ある日、勇気をふるってお誘いしたですよ、若い部員を。

[さとなお『人生ピロピロ』(角川文庫, 2005.)]

『若者』は、たとえば「気持ち悪いがかわいい」という意味の「キモカワ」,「半端でなく(すごい)」を「パねえ」といった、いわゆる「若者ことば」をしゃべる。若者ことばは新しいことばの一種だが、同

¹⁵ 現実の老人に男女の違いが無いと言っているわけではないことに注意されたい。

じく新しいことばである外来語がもともとのことば(外国語)をなぞる形でできているのは対照的に、もともとのことば(一般のことば)を崩す形でできているところに特徴がある。たとえば、「これ、からくない？」などと形容詞(「からい」)の否定形(「からくない」)で相手に同意を求める際、「からくない」全体を上昇調でしゃべる、つまり最も低い声で「か」と言った後、少し高く「ら」、もっと高く「く」、さらに高く「な」、そして最も高く「い」と言うように、『若者』は形容詞否定形の全体を上昇調イントネーションで発する。

『年輩』は「ドロンする」(消える意)他のいわゆる「オヤジ言葉」を発するが、文法や発音の面で『年輩』特有のしゃべり方と呼べるものはなかなか見つからない。偉そうな言い方や媚びへつらった言い方とは、結局のところ『格上』や『格下』のしゃべり方、つまり「格」に応じたしゃべり方であり、「年」に応じたしゃべり方ではない。『老人』と『幼児』の間は、「年」よりも「品」「格」「性」が大きな意味を持つと言えるかもしれない¹⁶。

5.6. 補足 1: 日本語には役割語ほどの程度あるのか？

ここで、読者の理解の助けになると思える 2 点の補足をおこなっておく。第1の補足は、「日本語に役割語ほどの程度あるのか？」という、多くの読者が共有しそうな疑問に関するものである。この疑問に答える上で、第 5.5 節の記述をふり返ってみよう。一見したところ役割語とは思えない「です」は、よく考えてみると『幼児』キャラの「でちゅ」「でしゅ」、『平安貴族』キャラの「でおじゃる」、『侍』キャラの「でござる」、『上流婦人』キャラの「ざます」、『体育会系』キャラの「っす」などと対立しているので、「です」としゃべる話し手の発話キャラクタは、『幼児』『平安貴族』『侍』『上流夫人』『体育会系』などではないキャラクタという消極的な形ではあるが、一部のキャラクタにかぎられているということになる。さらに、動詞に接続可能な「です」は「格」「年」が低い、やや『幼児』に近い特定の発話キャラクタの役割語であった。つまり、「です」は動詞には接続しないという従来の文法規則の妥当性は、実は話し手のキャラクタ次第である。

文法規則に対する発話キャラクタの影響は、さらに「発見の「た」」に関しても観察できる(定延 2007c)。ここで「発見の「た」」と言うのは、たとえば手帳を目の前にして「あ、手帳あった」と言う場合の、「発見」というきもちに動機づけられて現れるように見える「た」である。発見の「た」には、「事前の期待(いまの例でいえば「このあたりに手帳があるのではないか」というきもち)が、うっすらとであれ必要か、否か」という論点がある。この論点について、大学生の判断を調べてみると、たとえば次の(17a,b)で結果がずれる。(17a)文頭の「%」印は話者差が大きいことを示す。)

- (17) a. [友人とハイキングに行った自分が、ふと見ると、思いがけないことに、目の前にサルがいるので、友人に教えてやる]
%あつ、あんなところにサルがいたよ。
- b. [皆でハイキングに行こうと決めた、強引なおばさんが、思いがけずサルを見つけて]ほら、やっぱり来てよかったでしょ、ねえ、紅葉も綺麗だし、空気もおいしいし、あつ、見て見て、あんなところにサルもいましたよどうですこれー。

¹⁶ 発話キャラクタという概念は、文節や、感動詞の韻律の記述にも有効である。前者については定延・羅 (2011)、後者については定延 (投稿中)を参照されたい。

思いがけず、つまり事前の期待無しに発見された眼前のサルが「いる」ではなく「いた」と述べられ、発見の「た」が現れている点では(17a,b)に違いは無いが、自然さの判断は同じではない。話し手が自分自身である(17a)の場合は、自然という判断は辛うじて過半数を占める程度に過ぎないが、「強引なおばさん」の物言い(17b)については、調査した全ての大学生が自然と判断した。これについて筆者は「発見の「た」そのものは事前の期待を必要としない」とした上で、「発話キャラクターの影響は、この「た」が「自身の発見を相手と共同のものとしてしまう」という多少強引な物言いとしばしば結びつく結果の、副次的なもの」と考えているが、現象としては、発見の「た」に事前の期待が必要か否かが発話キャラクター次第の部分があるということに変わりはない。

以上に基づき、日本語の場合、濃淡の差こそあれ、基本的にはすべてのことばが役割語だと考えておく。これは別の言い方をすれば、『私たち』タイプの発話キャラクターは、「品」「格」「性」「年」の値がすべて「無指定」(第 5.1 節の(12a-d)を参照)になるということは無ということである¹⁷。

5.7. 補足 2: 他言語にも役割語はあるか?

第 2 の補足は「他言語にも役割語はあるか?」という、やはり多くの読者が抱くかもしれない疑問に関するものである。この疑問には方言や職業ことばの観点から答えておきたい。というのは、全てではないにしろ多くの言語には日本語同様、方言や職業ことばが想定できるからである。

第 4 節の(11)に挙げた定義からわかるように、役割語は、方言や職業ことばと相互排他的な関係にはない。したがって、或ることばが方言や職業ことばだからといって、役割語でないということにはならない。

もっとも、役割語をしゃべる発話キャラクターは、これまで述べてきたように「スタイル」と対立する概念である。したがって、方言や職業ことばが或るスタイルのことば(他のことばづかいとあからさまに切り替え可能なことば)として発せられる場合は、それらの方言や職業ことばは役割語ではない。たとえば、共通語でインタビューを受けている「地元民」A と B が、インタビュワーの目の前で方言で相談しつつ、インタビュワーには共通語で返答するという場合、その方言は役割語ではない。同様に、インタビューを受けている「同業者」A と B が、インタビュワーの目の前で職業ことばで相談しつつ、インタビュワーには職業ことばでない一般のことばで返答する場合、その職業ことばも役割語ではない。

また、発話キャラクターは「人格」と対立する概念でもあるので、方言や職業ことばが或る人格のことば(他のことばづかいと切り替え不可能なことば)として発せられる場合は、やはりそれらの方言や職業ことばは役割語ではない。たとえば、誰に対してしゃべる時も方言がまったく抜けず変わらないという話し手の場合、その方言は役割語ではない。またたとえば、浪曲師や笑福亭門下の落語家がわざと声をつぶしてそれらしい声を作るという風説が仮に真実だとすると、営業活動内だけでなく営業活動外の場面でもそのつぶれた声しか出しようがないので、その場合の職業ことば(つぶれた声質)は役割語ではない。

¹⁷ 日本語の文法については近年、「一塁へ送球。赤星の足」など、独特の言い回しを持つ「アナウンサー文法」、さらに「八百屋文法」など、話し手のありように応じて文法も多様であるとする考えが現れている(Iwasaki (2005 他)の「多重文法仮説 (Multiple-Grammar Hypothesis)」。この仮説によれば、文法は環境に応じて、その下位システムのうち一部だけを活性化させる。活性化のパターンは小文法 (component grammar) と呼ばれる。たとえば「1塁におくる。俊足赤星1塁セーフ。ここで赤星の足」のような、一般の人々が言いそうもないスポーツアナウンサーの発言を生み出す「スポーツアナ文法」は小文法の一つである。話し手のキャラクターという観点から文法の多様性を認める本稿も、多重文法仮説と同じ方向に向かうものと言える。

その一方で、方言や職業ことばが或る発話キャラクタのことば(他のことばづかいと切り替え可能だが、切り替え不可能ということになっていることば)として発せられる場合、それらの方言や職業ことばは役割語である。たとえば、「地元民」としてインタビューを受けている話し手のことばが、実は密かにふだんよりも方言色が濃かったり、「現場職員」としてインタビューされている話し手のことばが、実は密かにふだんよりも濃厚な職業ことばになっていたりする可能性があるとしたら、それらの方言や職業ことばは役割語である。このことからすれば、役割語は他言語にも幅広く観察されるということになる。

但し、他言語の役割語は日本語ほど豊富ではない。他言語における役割語は、より外面的な特徴を持つ発話キャラクタ(典型的には『異人』タイプ)の役割語に偏るようである¹⁸。

6. おわりに

本稿で論じたことは、発話には、これまで考えられていた以上に広範な部分において、意図が認められず、目的論的な発話観・道具的な言語観がこれまで認識されていた以上に限界を持っているということである。

これらの発話観・言語観がその限界を超えて現象説明に持ち込まれてしまい、発話のさまざまな局面が「実は無意識のうちに心のどこかで」意図されていたものだという形で「話し手の意図」が安易に設定されると、現象説明はリアルさを失ってしまう。こうした事態(定延 (2005b)では「意図の氾濫」と呼んだ)を避けるには、発話の観察には「スタイル」と「人格」だけではなく「発話キャラクタ」の観点も必要である。すなわち発話は「スタイルが関わる部分(あからさまに意図的に切り替えて構わない部分)」「人格が関わる部分(意図的に切り替えられない部分)」だけでなく、「発話キャラクタが関わる部分(実は意図的に切り替えられるが、切り替えてはならない。切り替えできないことになっている部分)」も持っている。そして、ことばは「道具」のような場合(意図的な切り替えがあからさまに可能な場合)だけではなく、「身体」のような場合もある。それが役割語である。

ここで役割語に対して用いた、「身体」というたとえには、次のような意味が込められている:紙を切るにはハサミ、釘を打つにはカナヅチという具合に、「道具」は目的に応じてあからさまに切り替えて問題ない。「遺伝子」は「道具」とはまったく異なり、意図的な切り替えが不可能である。「身体」は切り替えに関して「道具」と「遺伝子」の中間に位置する。たとえば見合い前にこっそり整形やナチュラルメイク¹⁹をするなど、実は「身体」は意図的に或る程度切り替え可能だが²⁰、その切り替えはあからさまな形では行われず(つまり自身が整形したことやナチュラルメイクをしていることは公言されず)、「身体」は切り替え不可能ということになっている。1人の話し手がスタイルをさまざまに使い分けることで変わることばづかいが「道具」にたとえられ、その話し手の人格と結びついた、常に変わらない部分が「遺伝子」にたとえられるとすると、その話し手の個々のキャラクタに応

¹⁸ 論者によって「役割語」の認識に揺れがあるため、以上の見解が必ずしも共有されているわけではないが、「役割語」を論じたものとしては、英語については山口 (2007)、中国語については定延・張 (2007)、韓国語については鄭 (2011)・定延 (2007b)、ドイツ語については細川 (2011)、フランス語については金田 (2011) などの研究例がある。

¹⁹ ここでは、化粧していると気づかれにくい、素颜(あるいは素颜に近い状態)に見える化粧を指す。

²⁰ ここではわかりやすい例として整形や化粧を挙げたが、それらに無縁の人間の身体もやはり或る程度切り替え可能である。というのは、身体には社会的側面があり、この側面が他者との絶え間ないインタラクションの中で実現するものであって(菅原 2010)、そのインタラクションに意図が(常にではないにせよ)入り込むからである。

じたそれぞれのことば(役割語)は、以上に述べた意味で「身体」にたとえられる²¹。

特に通訳・翻訳研究を背景とされる読者のために、最後に「キャラクタに関する通訳・翻訳において注意すべきことは何か？」という疑問を取り上げておこう。

たとえば“I”を「私」と訳すかそれとも「オレ」と訳すかといった、通訳・翻訳上のさまざまな問題はキャラクタに直結しており(cf. 太田 2011), それらの問題を巧みに解決して質の高い通訳・翻訳を実現するには、当該社会におけるキャラクタに関する(偏見も含めた)背景知識が必要になる。

だが、背景知識の重要性は以前から認識されてきたはずのことで、キャラクタに関するからといって特に何かが変わるわけではない。キャラクタという概念は、通訳・翻訳に新たな問題をもたらした通訳者・翻訳者の負担を増やすものではなく、従来から存在していた問題群に新しい位置づけを与え解法のヒントを与えようとするものである。

【定延先生プロフィール】

1962年大阪生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。神戸大学教養部講師、国際文化学部講師、同助教授、同教授を経て、現在、神戸大学大学院国際文化学研究科教授。専門は言語学・コミュニケーション論。著書に『よくわかる言語学』(アルク, 1999), 『認知言語論』(大修館書店, 2000), 『ささやく恋人, りきむレポーター—口の中の文化—』(岩波書店, 2005), 『日本語不思議図鑑』(大修館書店, 2006), 『煩惱の文法—体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話—』(筑摩書房, 2008), 『日本語社会 のぞきキャラくり—顔つき・カラダつき・ことばつき—』(三省堂, 2011), 論文に Toshiyuki Sadanobu and Andrej Malchukov (2011) "Evidential extension of aspecto-temporal forms in Japanese from a typological perspective" などがある。

【謝辞】: 本稿は、日本通訳翻訳学会第12回年次大会(2011年9月10日、於神戸大学)における同名の基調講演の内容に加筆したものである。改稿への有益なご示唆を下された方々にお礼申上げたい。基調講演に際して、藤濤文子先生、船山仲他先生(五十音順)、そしてスタッフの方々に大変お世話になったことにも、併せて感謝の意を表したい。本稿は、日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究(A)(課題番号: 19202013, 20242026), (B)(課題番号: 23320087)の成果の一部である。

【文献】

- 細川裕史 (2011). 「コミック翻訳を通じた役割語の創造 — ドイツ語史研究の立場から —」金水敏 (編) 153-170.
- Iwasaki, Shoichi. (2005). "Multiple-grammar hypothesis: a case study of Japanese passive constructions," Workshop: Phylogeny and Ontogeny of Written Language, Kyoto University, August 17, 2005.
- 鄭恵先 (2011). 「役割語を主題とした日韓翻訳の実践 — 課題遂行型の翻訳活動を通じての気づきとスキル向上 —」金水敏 (編) 71-90.
- 鎌田修 (2000). 『日本語の引用』ひつじ書房.

²¹ 人格・発話キャラクタ・スタイルの相互関係については定延 (2006) を参照。

- 金田純平 (2011). 「要素に着目した役割語対照研究 — 「キャラ語尾」は通言語的なりうるか — 」
金水敏 (編) 127-152.
- 金水敏 (2003). 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店.
- 金水敏 (2011). 「現代日本語の役割語と発話キャラクタ」 金水敏 (編) 7-16.
- 金水敏 (編) (2007). 『役割語研究の地平』くろしお出版.
- 金水敏 (編) (2011). 『役割語研究の展開』くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1995). 『基礎日本語文法 [改訂版]』くろしお出版.
- 太田眞希恵 (2011). 「ウサイン・ボルトの“T”は、なぜ「オレ」と訳されるのか — スポーツ放送の「役割語」 — 」 金水敏 (編) 93-125.
- 定延利之 (2005a). 『ささやく恋人, りきむレポーター—口の中の文化—』岩波書店.
- 定延利之 (2005b). 「「表す」感動詞から「する」感動詞へ」, 『言語』34-11, 33-39, 東京: 大修館書店.
- 定延利之 (2006). 「ことばと発話キャラクタ」, 『文学』7-6, 117-129, 東京: 岩波書店.
- 定延利之 (2007a). 「話し手は言語で感情・評価・態度を表して目的を達するか? — 日常の音声コミュニケーションから見えてくること — 」『自然言語処理』14/3, 3-15.
- 定延利之 (2007b). 「キャラ助詞が現れる環境」 金水敏 (編) 27-48.
- 定延利之 (2007c). 「発見の「た」と発話キャラクタ」『言語』36/12, 40-47.
- 定延利之 (2008-2010). 「日本語社会 のぞきキャラくり」三省堂ウェブサイト「三省堂 Word-Wise Web」<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/sadanobu> (日本語版);
<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/sadanobu-e/> (英語版);
<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/wp/author/sadanobu-c/> (中国語版).
- Sadanobu, Toshiyuki (2009). “Metamorphosis in Japanese manga and our daily communication,”
Studii de Știință și Cultură, 5/1, 16-25, Arad: "Vasile-Goldoș" University Press.
- 定延利之 (2011). 『日本語社会 のぞきキャラくり — 顔つき・カラダつき・ことばつき — 』三省堂
- 定延利之 (投稿中). 「状況に基づく日本語話しことばの文法」.
- 定延利之・羅米良 (2011). 「文法・パラ言語情報・キャラクタに基づく日本語名詞性文節の統合的な記述」 *Journal CAJLE*, 12, 77-95.
- 定延利之・張麗娜 (2007). 「日本語・中国語におけるキャラ語尾の観察」 彭飛 (編) 『日中対照言語学研究論文集: 中国語からみた日本語の特徴, 日本語からみた中国語の特徴』大阪: 和泉書院. 99-119.
- 菅原創・中島賢介 (2006). 「ごまめ・みそっかすの研究——伝承文化としての異年齢の仲間集団における特別なルールに関する調査(一)——」『北陸学院短期大学紀要』37, 13-24.
- 菅原和孝 (2010). 『ことばと身体 — 「言語の手前」の人類学 — 』講談社
- 勅使河原三保子 (2004). 「日本のアニメの音声に表された感情とステレオタイプ——良い人物と比較した悪い人物の声質——」『音声研究』8/1, 60-76.
- 山口治彦 (2007). 「役割語の個別性と普遍性 — 日英の対照を通して — 」 金水 (編) 9-25.